

研究ノート

田中ビネー知能検査開発の歴史

中村 淳子¹⁾・大川 一郎²⁾

History of the development of the Tanaka-Binet Intelligence Scale.

NAKAMURA Junko, OHKAWA Ichiro

The purpose of this paper was to trace the history and development of the Tanaka-Binet Intelligence Scale. The historical account begins with how the French-born Binet developed the world's first intelligence test in 1905. Next follows a description of how the thinking of Binet was used to develop a unique intelligence test that made use of an intelligence index. Following is the next historical step, a description of the regularly revised American Stanford-Binet Intelligence Scale. Since the 1916 development of this test, revisions have been made in 1937, 1960, and 1986 changing some of its characteristics. The paper then turns to discuss the contributions of Kouichi Miyake in 1908, and the history of the Binet method in Japan. Following this is the history of the development of the Tanaka-Binet Intelligence Scale. After Kannichi Tanaka developed the Tanaka-Binet Intelligence Scale in 1947, it was revised in 1953, 1970, 1987, and 2003.

Key words : intelligence test, Tanaka-Binet Intelligence Scale, Binet intelligence Scale, Stanford-Binet Intelligence Scale,

キーワード : 知能テスト, 田中ビネー知能検査, ビネー知能検査, スタンフォードビネー知能検査

1 はじめに

ビネー (Binet, A.) とシモン (Simon, Th) が, 1905年に最初の知能検査を開発して以来, 100年近くがたった。この間, 知能検査は大きな発展をとげ, 個別式, 集団式を問わず世界中で実施されるようになっていく。

残念ながらその一方で, IQの導入に伴い差別や選別の道具として使われてきた側面もある (Gould, 1996; 佐藤, 1997)。しかし, このことは, 知能テストという用具の「誤った使い方」によるものであり, その責は知能テストにある

わけではない。

ビネーの知能検査作成の意図は, 終始一貫して「子どもの知能水準の判定」にあり, その先の「一人一人の子どもの個性に合わせた教育」にあった。

本論文では, そのようなビネーの考えに基づいて作られたビネーテストの歴史をたどった上で, 現在, ビネー法の日本版として独自の展開を行っている「田中ビネー知能検査」の改訂の経過をたどっていく。

1) 田中教育研究所

2) 立命館大学文学部

2 ビネー法の歴史

2-1 ビネー法の誕生

1800年代後半からヨーロッパ諸国や我が国では、初等教育制度が確立し、義務教育化も始まった。その中で、学校の勉強についていけない子どもたちが出現していた。彼らは、怠け者扱いされ落第を繰り返していた。しかし、これらの子どもたちの中には、今日でいう知的障害児や発達障害等を伴う子どもたちも少なからずいた。

一方、学業不振は、怠けているからではなく能力不足であるから、特別なクラスで適切な教育を行うべきであるとする考えや運動もできた。その中心人物の一人がフランスのビネーである。後の特殊教育の発端ともいえるが、ビネーの真意は、「一人ひとりの子どもの個性に合わせた教育」の重視だった。

ところで、特別なクラスを作るとしても、どの子どもをそのクラスに編入させたらよいかの判断は難しかった。ビネー法が考案される前までは、医学的方法として両親の年齢や病理、子どもの出生順位、出生の状況など遺伝的な要素が調べられたり、解剖学的検査として身長や頭蓋の測定が行われたりもした。その他にも動作の敏捷性、容姿や表情などを手がかりとする方法などもとられた。

しかし、これらはいずれもまったくの的はずれではないとしても、やはり妥当性に欠けるものであった。

ビネーは思考の研究者で、自らの二人の娘を対象に長年研究をし続けていた（「知能の実験的研究」を1903年に発表）。彼は、注意、推理、判断など複雑な心的過程について熱心に取り組み、前述したとおり知的障害児の教育にも深く関心を寄せていた。

1904年にパリの文部省当局は、「異常児教育の利点を確実にするための方法を考える委員

会」を発足させたが、ビネーもこの委員の一人に任命された。当時彼は、知的障害を科学的に診断する必要性を痛感していた。そこで、弟子である精神科医のシモンの協力を得て、知能検査の作成に心血を注ぐこととなったのである。その結果、世界ではじめての知能検査法が、1905年フランスで「知能測定尺度；une echelle metrique de l'intelligence」として誕生した。

その後もビネーは、この検査法に改良を加えて1908年版、1911年版と次々に改訂していった。しかし、残念ながら1911年版を完成させた直後にビネーは死去した。ビネー・シモンの検査が知能検査として完全な形で発表されたのは、10年後の1921年になってからである。表1に1905年版、1908年版、1911年版の問題一覧を示す。

2-2 ビネー法1905年版

1905年にビネーらは、「知能劣等状態の科学的診断を確立する必要性について」「異常児の知的水準を診断するための新しい方法」「施設と小学校の正常児および異常児への新しい知的水準診断法の適用」という3つの論文を発表している。

第二論文の「異常児の知的水準を診断するための新しい方法」では、心理学的方法、教育学的方法、医学的方法、の3つの方法論を展開しており、このうちの心理学的方法で使用した検査問題が知能検査の原法となった。

この様な経緯からビネーとシモンによって開発された最初の知能検査（1905年版）は、様々な種類の30個の問題により構成されている。30個の問題は易しいものから難しいものへと配列された段階式検査法であった。

その第1問目は、「凝視（じっとみつめる）」である。これは、子どもが“物をじっと見つめることができるか”；“追視することができるか”を調べる問題で、燃えているマッチを子どもの

目の前で左右に動かし、目と頭の動きを観察するのである。最後に配置された第30問は、「抽象語の定義」という問題である。これは、「尊敬と友情」、「退屈と苦悩」の相違点を述べさせるという、高度な内容であった。

2 - 3 ビネー法 1908 年版

1908年の論文「児童における知能の発達」では、3歳から13歳までの児童の知能発達、知能検査結果の記録と解釈、検査の検証、知能の意義、知能測定尺度の活用、の4章に分かれて論じられている。

1908年版の注目すべきところは、1905年版では30個しかなかった検査問題が57個に増やされたことである。しかも3歳級から13歳級までを1か年間隔で区切り、それぞれ4～8個の問題を配置するという作業がなされている。1905年版は、異常児の診断や発見に主眼をおいた検査法であったのに対して、この版では、子どもたちの知能を「発達が遅れているもの」「発達がゆっくりしているもの」「正常なもの」「正常よりも3年から4年進んだもの」の4種類に分類している。

表1を見てもわかるように1905年版から1908年版に改訂するにあたって、ビネーとシモンがまったく変更しなかったのは、わずか14問題である。ある問題は一部分を変更し残されたが、削除された問題もある。そして、新たに作られた33問題が付け加えられ57問題となったのである。また、この版では各年齢段階の子どもの反応が詳しく記載されており、合格基準も明確化されるなど検査法としての体裁が整えられてきている。

2 - 4 ビネー法 1911 年版

ビネーは、1911年に「学童の知的水準測定に関する新研究」という論文を発表する。

この版は、学童用であることから6歳級から

10歳級までを綿密に1年齢ずつの区分とし、それ以降は、12歳級、15歳級、成人級という構成になっている。そして、各年齢段階の問題は4歳級（4歳級のみ、4問）を除き5問ずつに揃えられ、知的水準をより正確に調べるための規則性が導入された。つまり、「全問題を及第した年齢を出発点とする…」などが述べられており、基底年齢を設定して精神年齢（ビネーは知的水準と呼んだ）を求める方法が明確にされているのである。

また、「標準的環境にいるパリの小学校児の知的水準を測定して得られた結果」として通過率表が記載されていたり、「知的水準と学力との関係」「教師による生徒の知能の測定」などが調べられ、妥当性が検証されている。さらに、再検査法を用いて信頼性も調べられている。このように心理検査作成上の基本的な方法がすでにビネーによって完成されていたのである。しかし、この年にビネーは他界している。

ビネーの死後10年の歳月を経て、1921年にビネー法は「心理検査の実施手引き」としてシモンによってまとめられた。内容は、1908年版と1911年版を合わせた形で整理されたものである。年齢尺度として3歳～10歳の各年齢級8区分と、12歳級、15歳級、成人級の計11の年齢区分となっている。

ビネーは、死の間際まで適応的、発明的反応のことや「行為の態度」について語っており、いずれこれらの検査項目も取り入れるつもりだったろうことは想像に難くない。彼は、1911年版を完成されたものとは考えてはならず、これからも次々と改訂を加える予定だったのである。

3 スタンフォード・ビネー法

ビネー法は、画期的なテストとして評価され、フランスを除くヨーロッパ及びアメリカなどの

諸外国へ瞬く間に広まっていった。多くの国で翻訳されたが、各々の国に合うような検査法へと作り直す作業、つまり再標準化の試みもなされるようになった。その中で最も大規模な再標準化は、アメリカのターマン (Terman, L. M.) によって行われたスタンフォード・ビネー法 (Stanford-Binet Intelligent Scale) である。

3 - 1 1916年版

ターマン (Terman, L.M) は、1916年に自分の勤務校の名をつけた「スタンフォード改訂増補ビネー・シモン知能測定尺度」を公表した。この改訂尺度は、ビネーの1908年版を使用し、1910年から標準化作業を開始したものである。ターマンの検査は問題数が90問もあり、標準化のための被検査者数は1,378名に上っている。

スタンフォード・ビネー法の最も大きな特徴は、ドイツのシュテルン (Stern, W.) の提案に従って精神年齢と生活年齢との比で求める知能指数 (IQ) を採用し、普及させたことである。問題構成は、各年齢級の問題数を10歳級まではすべて6個に統一し、実施法や採点法、結果の表示法などを整備するなど、使いやすく工夫されている。また、検査問題は、ビネーのものより一層子ども向けの内容となっている。例えば、図版1つを比較してもビネー法が大人向けの版画であるのに対して、ターマンの検査法は子どもの絵本に近いタッチのものを採用している。

3 - 2 1937年版

1937年にターマンは、メリル (Merril, M. A.) と共にまったく新たな発想を持った「新スタンフォード改定案」を発表した。この版では、L式 (Form L) とM式 (Form M) と名付けられた2つの同質の検査 (平行検査) が作られた。

L式は、ほぼ従来の検査に準じているが、M

式は動作による検査を主としている。これら2つの検査は、難易度や妥当性、信頼性などにおいてほぼ等しいように作成されている。つまり、L式とM式のどちらを実施しても同じ被検査者であれば、ほぼ同一の検査結果を得られるものであった。

そして、旧法 (1916年版) では5歳級以下と11歳級以上の問題が適切でなかったとして、主に以下のような変更を加えている。

年少の子ども向けにカラー化された積木やビーズなど具体的な材料を用いたり、言語を用いない問題を多く採用した。

発達の速度を考慮して4歳級以下の年齢間隔を1年ではなく、半年ごとに修正した。

問題数を90個から129個に増やし、2歳から成人まで適用できる検査にした。

1937年版では、2,904名の被検査者が対象となっている。

3 - 3 1960年版

1937年版での平行検査は1960年版ではL・M式として一本化された。

この版での大きな改訂は、精神年齢は算出するものの、それを生活年齢で割る従来どおりの知能指数 (IQ) を廃止したことである。代わりに偏差値を基本とした偏差知能指数 (DIQ) を採用している。スタンフォード・ビネー法がIQからDIQにシフトしたことで、ウエクセラ一系の検査などにより近づいたものとなった。

1972年には、1960年版の尺度のみを標準化し直したものが発行されるが、内容的な変更は見あたらなかった。

3 - 4 1986年版

1986年にソーンダイクら (Thorndike, R.L. Hagen, E.P. & Sattler, J.M.) によって、「スタンフォード・ビネー知能尺度第4版」が公刊された。

この版は、ビネーという名はついているものの、ビネー法の基本概念である年齢尺度や精神年齢を廃止し、因子構造モデルの検査へと変更されている。すなわち、ホーン(Horn, J. L.)とキャッテル(Cattell, R. B.)の「結晶性知能」、
「流動性知能」の2つのモデルと、「記憶」を加えた3つ(Three-Level Hierarchical Model)に
認知能力を類別して捉えようとしているのである。しかし、ビネー法が測定しているとされる
一般知能を尊重して、それに相当する一般的推論因子(g)を一番上のレベルに据えてはいる。

ソーンダイクらは、「問題内容については1960年版の問題をほぼ踏襲して作成した」ことを強調した上で、これまでのスタンフォード・ビネー法とは異なる以下の点を上げている。

同じタイプの問題は、グループ化して15問の下位検査にした。

15個の下位検査を、「言語的推論」「抽象的/視覚的推論」「量的推論」「短期記憶」という4つの領域に分けた。

検査結果を、15下位検査毎の各得点と4領域の各得点とその合計得点、さらに一般的な推論能力(g)を査定する合成得点が表示されるようにした。

語彙検査を生活年齢と共に各被検査者の能力レベルにあった問題から開始するための基準とした。(注:ビネー法では、生活年齢と等しい年齢級から問題を開始した。しかし、第4版では提示順序の手がかりが得られないため、語彙検査をまず生活年齢で規定された問題から実施して、そのでき具合から基底レベルや上限レベルを決定するのである。そして、この結果を基に他の下位検査の開始問題をも決定するのである。)

ソーンダイクらは、第4版の特徴を以下のように述べている。

「被検査者の幅広い認知機能や情報処理能力

がアセスメントできる。また、実施法は柔軟で生活年齢に基づいた全検査を行うこともできれば、(情報を得るために)必要性の高い特定の問題のみを実施することもできる。被検査者の実力に照らした問題の施行がなされるので、負担が少ない。したがって、検査結果の信頼性も高くなる。」

「精神発達遅滞、学習障害等の子どもの選別やそれらの子どもへの理解を教育者や心理学者に提供すること。優秀児を特定したり、2歳児から成人に対する、認知スキルの発達を学ぶ手助けとなる。」

これらのことから推測されるように、1986年版「スタンフォード・ビネー知能尺度第4版」は、相対評価や因子構造を重んじるより分析的なウエクスラー系の検査に近づいたといえよう。

4 日本におけるビネー法

田中ビネー知能検査の祖である田中寛一は、「田中びねー知能検査法・1954年改訂版」の中で、それまでの日本におけるビネー版の紹介者、開発者として、三宅鉦一、久保良英、鈴木治太郎をあげている。三宅はビネー法を初めて日本に紹介し、久保はビネーの考え方に基づいて日本で初めて知能検査の標準化を行っている。また、鈴木はその生涯をかけて対象者の数、標準化の質ともに類をみないレベルでの標準化・改訂を行いつづけた。

以下、田中(1954)を補いながらその内容について紹介していく。

4-1 三宅鉦一(1876-1954)

日本にビネー法を最初に紹介したのは、三宅鉦一(東京帝国大学精神医学教室)であった。三宅は日本における精神医学の勃興期からその発展を担った医学者の一人であり、その生涯の

活動は、「精神病診断及び治療学」「不良少年調査報告」「白痴及低能児」「精神測定法」「精神病院の結核」「精神病院法」「東京府立松沢病院」「医学的心理学」「犯罪精神病学」「精神衛生」「東大精神病学教室」「東京大学医学部脳研究室創設」と多岐にわたっている(金子, 1963)。

三宅は、欧州への留学(29-31歳)の際、クレペリンからの影響も受け、それが、精神病学への実験心理学の導入とへとつながっていった(金子, 1963)。

さて、ビネー法の日本で初めての紹介は、1908年(明治41年6月)「医学中央雑誌6巻1号~3号」において池田隆徳との連名で「知力測定」という論文を通して行われた。その中でビネー・シモンの1905年版を紹介したのである。

三宅は、このビネー法とチーエン(Ziehen)の精神検査法を参考として「余の知力測定」と名付けた25問題からなる尺度を作成し、発表した。そして数例ではあるが通常の子どもや知的障害児に実施し、実験結果の報告を行った。三宅の検査の構成は、最初の7問は1, 2歳児用とするなど、28個の問題を易しいものから難しいものへと配列しており、これはビネー法にならったものである(ただし、問題内容はビネー法とは異なる)。

その後も三宅は、ビネー法1908年版を「通俗病的児童心理講話」(三宅, 1910)という書で翻訳紹介している。三宅の尺度は、不完全なものではあったが、ビネーにとっても予備的研究段階の1905年版を発表した直後に、我が国で最初の尺度を発表したという点で特筆されてよいだろう。

三宅の他にも市川源三や上野陽一が1911年(明治44年)に、ビネーの1908年版を紹介している。上野は、1912年(明治45年)に「教育学術界」誌上で、1908年版に続いて1911年版も紹介し、解説も加えている。

4-2 久保良英(1883-1942)

我が国で本格的にビネー法を標準化したのは、児童心理学を専門領域とする久保良英である。以下、鈴木(印刷中)を参考にその生涯、検査法の内容を紹介する。

久保は、東京帝国大学心理学専攻卒業後(1909)、同副手、中学教員を経た後、東京帝国大学大学院に進学、東京市教育課の視学を勤め(1911)、1913年~1916年、アメリカに留学しクラーク大学のホール(Hall, G.S)の指導を受けている。帰国後は、東京帝国大学の講師を勤め、1922年広島高等師範学校、1929年からは広島文理科大学の心理学教室の教授として、その創設、発展に尽力した。

久保の業績は多岐にわたるが、1917年からの児童教養研究所(1918年に児童研究所)での実践的な活動と1917年~1937年までの全17巻にわたる「児童研究所紀要」の編集・執筆がビネー法の標準化と大きく関わっている。

久保は、1918年、児童研究所紀要の第1巻に「小學児童の智能査定の研究」を発表している。そこでは、ビネー式知能検査を日本の風習にあわせた形で導入することを目的として、5歳~15歳級までの問題を各年齢級5問、合計40問を作成している。標準化の対象となったのは120名の小学生である。統計的には、特定の分布や各項目の検討が行われている。そして、最後に改定案が提示されている。

児童研究所紀要の第3巻には「改訂せる智能検査法(1919)」を発表しているが、これは先の論文の改定案に沿った実験の報告であった。具体的には11歳級から14歳級の問題を追加した上で、満2歳児~満14歳までを対象にして合計140名に検査を実施している。正解の基準や実施上の注意も厳格に記述され、知能指数も算出できるようになっている。

そして、1922年に「増訂知能検査法」を児童研究所紀要第5巻に報告している。この尺度

は、2歳～14歳までを適用範囲としており、各年齢級毎に6個ずつ問題が配されている。そして、1個の問題について2か月の配当(加算月数)が与えられている。さらに、補助問題として非言語性の問題が各年齢級ごとに1個～2個用意されるなど、尺度として形式を整えるための工夫が色々となされている。また、対象者の知能の階級や分布も公表されている。しかし、残念ながら各問題に関する実験結果が明記されておらず、問題選定の拠り所が不明である。

この後も、児童研究所紀要を中心に久保のビネー法に関わる様々な論文が報告されている。その中でも、桐原葆見は、「就学前及び就學時に於ける児童の知能査定」として第10巻にこの久保の「増訂知能検査法」を1,335名の被検査者に実施して改訂を行った結果を報告している。

なお、この後、久保はターマンの1937年版スタンフォード改定案が発表されるとすぐに、L式検査のほうを日本の児童に適用できるか否かの調査を行った。

その調査結果を基に「国民学校児童知能査定法」を1942年(昭和17年)に発表した。これは小学1年～6年生までが適用されるテストであったが、全被検査者数が180名と少ないため、信頼性の点では難があった。

4-3 鈴木治太郎(1875-1966)

ビネー法に基づく検査法をその内容、標準化にあたっての対象者の数等、極めて高いレベルで完成させたのが鈴木治太郎である。

鈴木の研究は、「1期：学業不振児の研究(1903-1919)」「2期：知能測定尺度の標準化(1920-1941)」「3期：優秀智能児の研究(1937頃-1950頃)」「4期：智能薄弱児・浮浪児の研究(1938頃-1946頃)」の4期に大きく分けられるが、その底流にあるのは常に「特殊教育」であった(田中, 1962)。職歴としては、滋賀県の小

学校教員を皮切りに、大阪府師範学校教諭兼訓導、師範付属小学校主事、大阪市視学を経て、鈴木ビネー法の開発に専念するため1929年職を辞している。鈴木は、当時のことを以下のように述懐している。

「当時、私の家庭には一人の実子もなく、私はこの少年尺度を『生き物』と考え、私の長男としてこれを愛し、利害を外に、この育成に熱中しておったので、少々の困難はあっても、『この子』を『捨て子』にすることはどうしてもできない。・・・中略・・・内心ひそかに深く悩みを重ねたが・・・この測定尺度の完成は、わが国の教育方法改善の上に、きわめて大切であると深く信じているので、断然職を辞して、この育成に専念することに決意した」(鈴木, 1962)。

このように鈴木ビネー法の開発と改訂にその生涯を捧げた鈴木治太郎であるが、以下、鈴木(1962)を参考にその開発と改訂の経過を追っていくことにする。

ビネー式知能検査の作成に初めて着手したのは1920年(大正9年)である。当時の内外の資料を参考に、独自の創作問題もいくつか加えて66の問題からなる尺度を作り上げた。問題構成はビネーの原法に比較的類似している。

5年の歳月を重ねて無作為抽出された大阪地域の3,814名にこの尺度が実施され、「ひとまずつのとりまとめ」が1925年(大正14年)行われた。このときの論文が、「智能測定尺度の実験的統計的基礎」である。

ここでは、各年齢における問題毎の通過率(難易度)を算出して、各年齢における通過率が6ヶ月ごとにみることができるようになっている。また、欧米の先行研究との比較もなされている。このように丁寧な標準化尺度は、それまでの日本のものには見られなかった特徴である。

鈴木は、その後さらに「智能測定尺度の正確度についての考察(1928)」の中で、先の尺度

の統計的な側面を中心に考察を行ない、鈴木ビネー知能検査の本格的な標準化に着手した。そして、1930年(昭和5年)、「実際の個別の智能測定法」の刊行に至る。これが鈴木ビネー尺度の初版である。この後、さらに4問の問題を追加し、対象者の数を16000にまで増やし、2歳2ヶ月～20歳までを対象とした尺度の完成に至った。この成果は、「実際の個別の智能測定法(修正増補版)」「智能測定尺度の客観的根拠」としてまとめられている。1936年(昭和11年)のことである。

これ以降、1941年(昭和16年)に智能年齢を23歳にまで拡大した「修正増補版」を、1948年(昭和23年)に前回以降の研究結果や「IQ算出便覧」等も加えた改訂版を刊行した。また、内容的には大きな変更はないが、1956年(昭和31年)に「実際の個別の智能測定法<昭和31年版>」が刊行され、同じ年、「智能測定尺度の客観的根拠」が昭和11年版を修正・増補の上、発行された。

田中寛一(1962)は、鈴木治太郎の米寿に寄せた文書の中で、以下のように鈴木ビネー尺度を評価している。

「この尺度の特徴は、第一に最初に検査された被験者数が16000名という多数であったことで、これは外国にもその例をみないのであります。その上に、修正をくわだてられるたびに、新たに多数の被験者の成績を利用されたのであります。すなわち、被験者数の多かったことが、この尺度の最も重要な特徴であります。第2には、『智能測定尺度の客観的根拠』において示されているように、いつも数量的統計的に成績を処理されていることであります。

このように、多数の被験者について検査の結果を数量的に検討して、しばしば修正を重ねて完成されたのが、鈴木ビネー法であります。わが国において多くのビネー法のうちで鈴木ビネー法だけが信頼を得て、広く用いられてきたの

は偶然ではないのであります。」

この評価は、今なお、鈴木ビネー知能検査に対する評価としてあてはまるものである。しかし、昭和31年(1956年)版以降、現時点まで改訂はなされていない。

5 田中寛一(1882-1962)

日本におけるビネー法に基づく知能検査の1つとして田中寛一が1947年に発刊したのが「田中ビネー式智能検査法」である。この時点では、いくつかあるビネー式検査の1つにすぎなかった。しかし、現在、日本において広く使われている個別式知能検査の一つとして数えられるに至っている。

田中ビネー知能検査の歴史については、後述するが、それに先立ち、田中寛一の生涯、業績についてここで簡単に追っていく。

田中寛一は、1882年(明治15年)1月20日、岡山県赤磐郡で生まれる。岡山県師範学校、東京高等師範学校を卒業の後、山梨県師範学校の教諭を3か年ほど勤める。しかし、恩師の松本亦太郎(1865～1943)を慕って京都帝国大学(現、京都大学)哲学科に入学する。松本が京都帝国大学に実験心理学の講座を開設したことを知ったからである。

田中の卒業と同時に松本が今度は東京帝国大学(現、東京大学)に移ることになる。田中は、再びその後を追って東京帝国大学大学院へと進む。そして、大学院修了後も松本の元で研究を重ねていくこととなる。

田中の研究を時代別に区切るとおおよそ3つに分けられる。

[第1期] 基礎的実験研究時代<年齢: 31歳～44歳>
1913年～1926年頃(大正2年～15年)

[第2期] 教育測定学的研究時代<年齢:

44歳～53歳>

1926年～1935年（昭和元年～10年）

[第3期] 知能研究時代<年齢：53歳～>
1935年頃以降（昭和10年～）

第1期の研究は、田中が大学院在学中から助手時代、及び東京高等師範学校で教鞭を執っている時期に行われた。

この時期の田中の興味は、心的作業能率や疲労に関するもので学位論文には、「心的作動に関する実験的研究（1919年；大正8年）」「人間工学（1921年；大正10年）」「低圧と酸素欠乏の心身作動能率におよぼす影響（1925年；大正14年）」などがある。

このうち「低圧と酸素欠乏の心身作動能率におよぼす影響」の論文は、イギリスに留学して自ら被検査者となり、低圧室で実験した内容を基に書かれたものである。そのときのことを田中自身が1957年に紫綬褒章受賞記念祝賀会の席で述べている。

「大正12年（1923年）にイギリスに留学したとき、航空心理に関する実験を行った。それは、高空に上がったときに、低い気圧が精神や身体の働きにどのように影響するかを調べようとしたのである。

このため空気を抜いて低圧にする室がオックスフォード大学の心理学研究室にあったのでこれを利用した。なぜなら、当時の日本にはこのような装置がなく実験ができなかったためである。

この低圧室というのは、3人くらい入れる部屋で、これに実験者、被検者が入る。外にいる助手が、モートル（電動機）で空気を抜く、という仕掛けのものである。それまでは羊などを入れて外の窓から観察するというやり方をしていたが、私は自分で被検者となって（実験を）行った。主任教授に申し込みをしたところ、『使ってもよいが医者連れて行くように』と

言われたほど危険な実験であった。

私が被検者になっているとき、助手が間違えを犯した。というのは、まず、1分間に1,000フィートに相当する気圧にまで変化させ、一端止める。それから3,000フィートの状態に変化させる取り決めであったのを、助手がどう勘違いしたのか1分間に一挙に3,000フィートまで変化させてしまったのである。

私は、頭の真ん中から少し左にキリをもむような痛みを感じ、ジャン、ジャン耳が鳴り出し、聞こえなくなった。24,000フィートに相当する気圧（富士山の高さの2倍）ともなると、テーブルに触っている指は、手袋をはめているようで感じが鈍くなる。そのうち、爪が紫色になってガクリいく。気絶する。私は2回気絶した。そのとき、実験者が持っている酸素マスクをあてると蘇る。この蘇ったときは、夜が明けたように気持ちがよいものであった。（1957年 紫綬褒章受賞記念祝賀会における録音談話より）

この実験の影響で田中の左耳は、聞こえなくなった。

第2期の研究は、昭和に入ってから10年ぐらいの頃である。

この時期田中は、日本大学の講師や東京高等師範学校教授、東京文理科大学（後の東京教育大学、現在の筑波大学の前身）教授など、教鞭を執る傍ら日本職業指導協会などにも関与していた。

田中は、師範学校で教壇に立っていた経験からも常々“山勘的”“主観的”な教育ではなく、もっと客観的な手がかりから教育を建設しようと考えていた。その結果、教育測定の研究に手を染めるようになる。つまり、“正しいアセスメントに基づく適切な教育”を目指していたと思われる。この時期の代表的な著書には「教育的測定学（1926年；大正15年）」「教育的統計法（1928年；昭和3年）」などがあるが、これは教育科学化の先駆けとなった著作である。

また、統計学を応用した具体的な評価用具も創作する。いずれも独創的なもので、その後の教育評価運動の方向付けをしたといわれている。

田中が教育の科学化を目指した理由がうかがえる「直観の限界」という小文が残されているので、以下に紹介する。

「直観の限界：2個のお盆の上に、それぞれ5個と10個の卵が載せられているのを同時に見る事ができれば、そのどちらのお盆の卵が多いかは、幼児でもすぐわかる。けれども、正確に5個と10個とを確認するためには、何らかの方法で、そのものを数えなければならない。これは直観によってすべてがわかることの困難な1つの例である。個人差はあるにしても、直観には、わかる限度というものがある。

しかし、その限度の範囲内で実用上困ることがなければ、分析して細部までを測定する必要はなくなる。それ故、我々の日常生活では、直観によって問題を処理していくことが非常に多い。また、それがために、時には誤りを犯すこともある。

教師が子どもを観察するのに少しでも誤りがあったら困る。教師は子どもを正しく見る必要があるにもかかわらず、それは極めて困難なことである。この直観に、しばしば誤りがあるのは、直観する人の目の方に誤りがある場合と、子ども自身も持っている人格の複雑性が原因する場合とがある。この問題は、ある程度は標準検査の利用によって解決もされるが、それでも絶対とはいえない。大切なことは、人間の能力の限界を、はっきり知るために、直観にばかり頼らないで、客観的な分析をしてみることである(1959年 田中教育研究所々報より)。

この小文からもわかるように、教育評価や教育測定的重要性を説きながら、しかも客観性の測度である標準検査が絶対ではないことも喚起しているのである。

第3期は、いよいよ知能に関する研究へと没入する時期である。

田中寛一が知能研究を志した動機については、面白いエピソードが伝えられている。これについては、田中の愛弟子であり2代目の田中教育研究所所長となった鈴木清が以下のように述べている。

「田中先生が知能についての大研究を志した動機が面白い。これは私共が学生時代によく伺った話である。ハワイに住む各国の二世に、アメリカの心理学者が知能やその他のテストを実施したところ、東洋の小国と思っていた日本人の知能がすばらしい。不思議に思ったその心理学者は、日本は一風変わった国で、最も知的に優れている人たちだけが外国に移住するのだらう、と注釈した。

日本人の優秀性について確信を持っていた先生(田中)は、その注釈の誤りを科学的に正してやろうと思った。それには日本内地の子どもが外地の子どもに劣らないことを実証し、さらには他の民族と比較してみればよい。そのためには言語の異なる民族でも公平に測定できるような用具が必要となる。そこで万国共通の数字、図形、記号などで能力を測るB式テストを創案したのである。

B式テストを東洋諸国からアメリカにまでわたって実施研究したものが『東洋諸民族の知能に関する比較研究(1936年~1939年;昭和11年~14年)』『アメリカ都市における諸民族の知能(1941年;昭和16年)』『日本の人的資源(1941年;昭和16年)』などの論文や著作である。

なお、B式テストでは、我が国ではじめてTスコアによる偏差値方式を取り入れられたが、これについても1つの思い出がある。数年前、研究所を訪れた統計学のルーデシリ博士(ウイスコンシン大学)が、Tスコアの由来について話し、この方式は創案者のマッコールが、教育統計学の二大碩学ターマン、ソーンダイクの頭

文字をとって命名したが、これに田中先生のTも加えて3Tにすべきだとのウィットに富む挨拶をされた。…後略…（1963年 田中寛一先生，一周忌記念誌より）」

田中は、田中ビネーテストに限らず、多くの心理テストを開発しているが、田中にとってテストの作成が目的であったわけではない。それは、学問研究と教育指導の手段（道具）であった。

田中が「田中B式知能検査」や「田中びねー式知能検査法」を発表する以前にテストの大流行があった。しかし、田中がテストを公にした頃、日本は軍国主義の真っ直中で、田中のテストは、非難と敵意を受け「オオミタカラ（日本の宝である子ども）を測定するとは何事ぞ！」と暴論を浴びせられたのである。

このような諸般の事情もあって、1938年（昭和13年）から5年間を費やして1943年（昭和18年）に完成していた「田中びねー式知能検査法」は、終戦後ようやく1947年（昭和22年）に刊行されたのである。

その後も田中は、財団法人田中教育研究所を設立するなどして若い研究者の育成にも尽力したが、1962年（昭和37年）11月12日に80歳で死去した。心理学者としては、初めて紫綬褒章、文化功労者の顕影を受けた。

6 田中ビネー知能検査の歴史

先述したように、田中寛一が1947年に発刊したのが「田中びねー式知能検査法」である。この時点では、いくつかあるビネー式検査の1つにすぎなかった。しかし、現在、日本において広く使われている個別式知能検査の一つとして数えられるに至っている。その大きな理由の一つとして、多大な労力と時間を必要とする改訂が定期的に行われていることがあげられる。

初めての改訂は、1954年に田中によりおこ

なわれたが、1962年の田中の死後は、田中教育研究所によって、1970年、1987年、2003年と改訂が重ねられている。

以下、現在に至るまでの田中ビネー知能検査の改訂の経過をそれぞれの版の手引きを参考にしながらたどっていくことにする。表2に1947年版、1954年版、1970年版、1987年版、2003年版の問題を比較したものを一覧で示す。

6-1 1947年版（初版）「田中びねー式知能検査法」

田中は、1933年（昭和8年）から1938年（昭和13年）頃にかけて台湾、朝鮮を初めとする東アジア地域や欧米諸国の子どもたちの心身の特徴、特に知能に関する調査を行った。これらの調査を行うにあたって言語の影響を受けない図形や数字だけを用いた集団式の知能検査を作成した。

田中は、この集団検査の修正を重ねる中で「田中B式知能検査」を1936年（昭和11年）に発表した。（この知能検査は「田中B式」として親しまれ、時代に即した改訂を繰り返しながら今日に至っている）

しかし、一方で我が国の個別式知能検査が既存のものでは不十分であると考えていた。もっと精度の高い尺度が必要であると感じていたのである。そこで、1937年版新スタンフォード改定案を基にして「田中びねー式知能検査法」の作成にとりかかった。

田中は、1937年版スタンフォード改定案が主に4歳級以下と11歳級以上において不備であると考え、改良を試み、その上で問題数及び内容に大幅な変更を加えた。

具体的には、年齢尺度に関する原理や仮定、方法をすべてビネーの方法に従い、知能年齢（精神年齢）及び知能指数の算出方法はターマンの方法に従っている。また、その検査結果からの推断（診断）については、独自の方法を用

いている。

内容においては、幼児及び低学年の子どもに対する問題をできる限り言語に頼らない問題にしている。これは、1937年版スタンフォード改定案のM式を参考にしたと思われる。

また、高学年の子どもや成人に対する問題としては、機械的な暗記問題を減らして、抽象語や格言の意味を捉える問題を多く採用している。したがって、概念を使いこなす能力をみることに重点を置いた内容となっている。

他にも子どもの興味を引くように実物（具体的な材料）を用いること、教示が簡潔かつ明確で、採点も客観的に簡単に行えることなど、様々な工夫がなされている。

問題数においては、2歳級から4歳級までは12個ずつの問題を配置し、5歳級から14歳級までは、各6問ずつを配置している。そして、15歳以上を成人とみなし、4段階（普通成人、優秀成人、優秀成人、優秀成人）で各6問、計24問の問題を配置している。問題の合計数は、120問にのぼる。

これは、1937年版スタンフォード改定案の129問は別にして、1911年版のピネー・シモン尺度が54問、鈴木ピネーが70問（初版66問）であるのに比べてかなりの多さである。

標準化作業は、1938年（昭和13年）9月から着手された。予備調査を何度も重ねた末、本調査等すべてが終了したのは、5年後の1943年（昭和18年）4月であった。延べ被検査者数は、4,886名である。

しかし、前述したように戦争の影響等もあり、この検査法が正式に発刊されたのは、戦後の1947年（昭和22年）であった。

6 - 2 1954年版「田中びね一式知能検査法」

改訂の要点は、田中の言葉を借りると、不適当とおもわれる検査問題を他のものとりかえたこと、各問の説明をわかりやすくしたこ

と、検査実施上の便宜のために全体の組み替えをしたこと、挿絵を美しく感じのよいものにしたとともに、それらの絵を別冊付録として、検査に便にしたこと、各問合格率の諸表と付録、統計的処理法概説とを削除したこと、また、全体として漢字を少なくし、新しいかなづかいによったこと、などである。

この1954年版は、実施法、実施用具等の改訂が中心におこなわれており、新たな再標準化はおこなわれていない。

6 - 3 1970年版「新訂版 田研・田中ピネー知能検査法」

この版は、田中の亡くなった年、1962年（昭和37年）から改訂作業が開始され、1970年（昭和45年）の発行まで8年間が費やされている。

1947年版（初版）と1954年版は、田中の単著であったが、これ以降の改訂版は「財団法人田中教育研究所編」として発行されることになる。

1960年代から1970年代の我が国は高度成長期にあり、国民の生活環境は激変したといっても過言ではない。それに伴って再標準化された1970年版では、以下の8点を改訂のねらいとしている。

すなわち、現代の子どもに合わせた検査の尺度化、絵の現代化、ミニチュア用具の採用、教示や問題文の現代化、再質問の設定、正答基準の明確化、問題配当の適正化、基底年齢の表し方の合理化、である。

このうち、再質問の設定と基底年齢の表し方の合理化は、過去の版にはなく、新しく設けられたものである。

「再質問」とは、被検査者の反応が正答なのか誤答なのか判断し難い場合、再度質問をして確かめる方法である。ピネー法は合格か不合格か（正答か誤答か）の二元法であるため採点を

どちらかに決めなくてはならない。

それまでの版では、正答、誤答の例は載っていても、どちらとも判断し難い例は記載されていなかった。そのため、実際の実施にあたっては、採点に迷うこともしばしばだったのである。例えば、同じ回答であってもあるテスターはその回答を誤答とし、またあるテスターはヒントを与えて正答にしてしまうなど、採点がまちまちであった。

そこで、テスターによる相違やズレができるだけ生じないように、一定の基準を設けて質問の仕方などを明確にしたのである。

基底年齢については、1970年版以前の旧版では、例えば4歳級の問題群は3歳児の集団が60～75%の合格率を持つものであった。したがって、4歳級を全問合格したとき基底年齢は、4歳としていた。

しかし、4歳級の問題は4歳児が取り組む問題とすべきだとの考えから、3歳児の集団を基準とした問題は3歳級に、4歳児の集団を基準とした問題は4歳級へと改めた（すべての年齢級の問題群を今までのものより1歳ずつ繰り下げた）のである。したがって、4歳級を全問合格したならば、基底年齢は5歳となる。

このような改訂方針の下、改訂が進められていった。

改訂経過としては、まず1962年から予備調査を行い、4歳から14歳の297名が対象となった。その結果を基に1967年から1968年にかけて本調査を行った。被検査者は、2歳から12歳の747名であった。

6 - 4 1987年版「全訂版 田中ビネー知能検査法」

1970年版から十数年を経たこともあり、社会や子どもの状況変化に伴い、尺度や問題内容の改正が必要となった。そこで、1982年（昭和57年）から1986年（昭和61年）にかけて改

訂作業が行われた。

1987年版の特徴は、全訂版と銘打っているように単に時代に即した検査にするためだけの再標準化ではなかったことにある。

この版ではまず、長年検査に携わっているベテランテスターや研究員など専門家による全問題の見直しが行われた。その結果、改正及び新たに作られた問題は、32問にも及んだ。第一次予備調査は、まず32問題についての妥当性を検証するために、1歳から13歳の約300名が対象となり個別で調査が実施された。また、集団で実施が可能な問題については、主に成人級についての検討であるので、大学生を中心とした約300名の対象者に集団調査を行った。これらの調査結果を基に32問題の精選及び適切な年齢級への配置を行った。

第二次予備調査は、第一次予備調査で選択された問題も含めて全年齢級、全問題についての検討のため、1歳から23歳までの534名を対象として実施された。この調査は、すべて個別で行われた。第二次予備調査の結果を詳細に分析検討し、余分に用意された問題の取舍選択を行い、各年齢級の問題を決定した。

本調査（標準化調査）は、1985年から1986年にかけて実施された。被検査者の人数は1歳から23歳までの1,014名であった。

このような過程を経て、ビネーの精神を受け継ぎながらも、また初版の基礎となったターマンの1937年版スタンフォード改定案のよいところは踏襲しながらも、この版は、より日本独自の検査法へと変わった。

新たに作られた問題は、他のビネー法にはまったくなかったものであり、我が国の環境や状況を踏まえた上で、発達をよく捉えた問題が新作された。

特に成人級の問題は、初版から1970年版までまったくといってよいほど問題も構成も変えられておらず、単に時代に合わせて多少表現な

どが変更されただけであった。したがって、この版の変更は画期的であったといえよう。

問題数については、従来の版が120問であったのが118問と減少しているが、内容はむしろ充実したといえる。つまり、新作問題が成人級だけで6個あり、問題名は変更されなくても新しく作り替えられた問題も6問あった。

さらに、1970年版までは「普通成人」「優秀成人」「優秀成人」という区分であったのを「成人」「成人」「成人」のように適切な名称に改められた。

結果の表記については、スタンフォード・ビネー法が1960年から従来の知能指数(IQ)を偏差知能指数(DIQ)に変更したこともあり、十分な議論を尽くされた。その結果、従来のIQを基本とすることにした。ただし、DIQも算出できるように各年齢毎の精神年齢の平均値や標準偏差を月単位で提示するようにした。

6-5 2003年版「田中ビネー知能検査」

2003年版は、初版から数えて五番目に当たるため正式名を「田中ビネー知能検査V」とした。

改訂の主旨及び改善点の骨子は、以下の通りである。

1987年版から10年が経過したこともあって、再標準化の時期を迎えたこともあり1998年から改訂作業に着手した。問題検討に十分な時間をかけた後、予備調査は2000年3月～8月に実施した。被検査者数は763名であった。

本調査は、2001年5月～12月に実施し、被検査者数は987名である。予備調査・本調査の延べ人数は、1,750名で、これらはすべて個別に実施された。

田中ビネー知能検査の特徴は、現代の子どもの発達に適した尺度、1987年版をほぼ踏襲、2歳～13歳までの被検査者は、従来どおりの知能指数(IQ)及び精神年齢(MA)

を算出、14歳以上は原則として偏差知能指数(DIQ)を算出するが、精神年齢は原則として算出しない、成人の知能を分析的に測定、検査用具の一新(図版のカラー化・用具の大型化)、1歳級以下の発達を捉える指標の作成、アセスメントシートの採用等に集約されよう。

2003年版田中ビネー知能検査の詳細については、また、機会を見て報告する予定である。

7 おわりに

筆者らは、田中ビネー知能検査の改訂に1987年版から関わってきているが、今回の「2003年版田中ビネー知能検査」の開発にあたり、ビネー法に始まり、ビネー法の日本への導入、田中ビネー知能検査の改訂の経過をたどろうというのが本稿の目的であった。

改訂にあたり我々が求めていることは、「今の子どもにあったよりよい検査を作る」ということにつける。しかし、その先にあるのは、「自分の作った尺度の意図はレッテルを貼るためではなく、手を差しのべ、改善するために特定することである」とするビネー自身も述べている知能検査開発の目的である。

「検査のために対象者(子ども)があるのではなく、対象者のために検査がある」。このごく当たり前のことを常に念頭に置きながら、知能検査という道具をつかうことによって、より一歩でも対象者の客観的な理解に近づき、その理解の上に立った対応を考え、実践していきたい。

文献

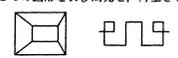
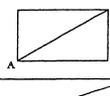
- Binet, A., & Simon, Th. 1911 A method of measuring the development of the intelligence of young children. Lincoln, Illinois: Courier Company. (中野善達・大沢直子訳 1982 知能の発達と評価)

- 知能検査の誕生 福村出版)
- Binet, A., & Simon, Th. 1921 La mesure du developpement l'intelligence chez les jeunes enfants. (大井清吉・山本良典・津田敬子訳 1977 ビネー知能検査法の原典)
- Gould, S.J. 1996 The mismeasure of man, Revised and expanded, with a new introductions. W.W. Norton Company. Ltd. (鈴木善次・森脇靖子訳 1998 増補改訂版人間の測りまちがい 差別の科学史 河出書房新社)
- 金子準二 1963 三宅鉦一博士事績(伝記業書29 三宅鉦一博士事績 1988 大空社)
- 文学博士鈴木治太郎先生米寿祝賀記念行事実行委員会 1962 遍歴 鈴木先生と知能測定尺度(伝記業書29 三宅鉦一博士事績 1987 大空社)
- 鈴木治太郎 1962 知能測定尺度と私の生涯 文学博士鈴木治太郎先生米寿祝賀記念行事 実行委員会編 遍歴 鈴木先生と知能測定尺度(伝記業書29 三宅鉦一博士事績 1987 大空社)
- 鈴木朋子 印刷中 久保良英によるビネー式知能検査の改訂 心理学史・心理学論 第5号
- 三浦正江・小川恭子 2001 ビネー測定法 心理アセスメントハンドブック第2版 西村書店 p48-57
- 中瀬惇 1992 ビネー法 氏原寛他編 心理臨床大事典 培風館 464-470
- 佐藤達哉 1997 知能指数 講談社
- 佐藤達哉 1997 知能検査と性格検査 佐藤達哉・溝口元編著 通史日本の心理学 北大路書房 173-186
- 田中和一郎 1962 鈴木先生の人と業績 文学博士鈴木治太郎先生米寿祝賀記念行事 実行委員会編 遍歴 鈴木先生と知能測定尺度(伝記業書29 三宅鉦一博士事績 1987 大空社)
- 田中寛一 1947 田中びねー式知能検査法 世界社
- 田中寛一 1954 田中びねー式知能検査法 日本文化科学社
- 田中寛一 1962 鈴木先生の米寿によせて 文学博士鈴木治太郎先生米寿祝賀記念行事 実行委員会編 遍歴-鈴木先生と知能測定尺度(伝記業書29 三宅鉦一博士事績 1987 大空社)
- 田中教育研究所編 1970 T K 式田研・田中ビネー知能検査法 田研出版
- 田中教育研究所編 1987 全訂版田中ビネー知能検査法 田研出版
- Thorndike, R.L., Hagen, E.P.&Sattler, J.M. 1986 Stanford-Binet Intelligence scale: Fourth Edition: Examiner's Handbook. The Riverside Publishing company.
- Thorndike, R.L., Hagen, E.P. & Sattler, J.M. 1986 Stanford-Binet Intelligence scale: Fourth Edition: Technical Manual. The Riverside Publishing company.
- 付記1 本論文は、「田中教育研究所編集 中村淳子・大川一郎・野原理恵・芹沢奈菜美編著 田中ビネー知能検査 理論マニュアル 田研出版 2003」の「知能検査の発展と意義」を大幅に加筆したものである。
- 付記2 本論文の執筆にあたって、佐藤達哉氏(立命館大学)より貴重な文献の紹介を受けた。ここに記して感謝申し上げる。

(2003.7.16. 受理)

表1 ビネー-原版問題一覽

1905年版	1908年版	1911年版
<p>1. 凝視：物を見る行動に伴う頭と目の動作に協応があるか否かを調べる（火のついたマッチを子どもの目で動かし追視するかどうか）。</p> <p>2. 触覚の興奮によって引き起こされる把握動作：手の触知覚をつかんだり口に持っていく動作との協応を調べる（例えば棒を子どもの手に触れさせて、それをつかんだり、口に持っていくかどうか）。</p> <p>3. 視覚刺激によって引き起こされる把握動作：物を見ることとつかむとの間に協応があるかを調べる（子どもが手の届く範囲に置かれた物をつかんだり、口に持っていくかどうか）。</p> <p>4. 食物の認識：視覚によって食べられる物と食べられない物を弁別する（チョコレートとよく似た木製立方体を提示し、反応を調べる）。</p> <p>5. 障壁によって困難にされた食べ物の探索：簡単な記憶力と意志的努力と動作との協応が調べられる（チョコレートを子どもの目の前で紙にくるみ提示する）。</p> <p>6. 簡単な命令の実行と単純な動作の模倣：動作および動作の意味理解など、さまざまな協応と連合が要求される（命令に従って座ったり、物を拾い上げる等。検査者の動作を見て、手をたいたりする等）。</p> <p>7. 事物についての言語的知識：事物とその名前とが連合しているかを調べる（眼、鼻、目、足、手、鼻、耳、口など身体部分の指示。ひも、コップ、難な身近な物の指示…「ひもをください」）。</p> <p>8. 言語による絵の認識：絵の中の事物と名前とが連合しているかを調べる（絵の中の物を指示…「窓はどこ？」）。</p> <p>9. 指示された物の命名：8問と同様であるが、方法は逆になる（「これは何ですか？」と検査者が示した絵の名前を言わせる）。</p> <p>10. 長さが異なる2線の直接比較：知覚した1線と別のもの1線を比較し、相違を見つけ出す精神運動が要求される（4cmと3cmの2線が描かれている3枚の図を見て、長いほうを指示）。</p> <p>11. 3数詞の反唱：直接記憶と意図的注意を調べる（連続しない数詞…3-0-8を復唱する）。</p> <p>12. 2つの重さの比較：注意力、比較力、距離感が要求される（3gと12g、6gと15g、3gと15gなど重さは異なるが同じ大きさの立方体2個のうち重たいほうを選択）。</p> <p>13. 被暗示性：判断力と性格の抵抗との葛藤を探る（①ひも、コップ、雌（7問に同じ）を提示して、「ボタンをください」と存在しない物を要求。②絵の中の物を指示させて、最後に無意味語である「パタプム [patapoum]、ニチェボ [nitchevo] はどこ？」と問う。③長さが違う2線の比較の後で、等しい長さの線を示して「どちらが長い？」と問う）。</p> <p>14. 既知の物の言語的定義：語彙といくらかの一般概念が要求され、簡単な自分の考えを表現できるかを調べられる（家、馬、ママとは何かを問う）。</p> <p>15. 15の単語で構成されている文章を反唱：言葉の記憶、直接記憶であり、言語活動および意図的注意力が求められる（私は、朝起き、服に着替えをし、夜に寝ます）などの文章を1回だけ聞かせ、復唱させる）。</p> <p>16. 想起による既知の物の比較：観念作用と相違を考える能力および観察力が要求される（紙とボール紙、蝶と蜂、板とガラスなどの2つの物の差異を問う）。</p> <p>17. 絵についての記憶問題：注意力と視覚的記憶力が要求される（13枚の絵「織、縫、釘、乗合馬車、棒、ベッド、さくらんぼ、バラ、口、鼻、子どもの頭、卵、風景」を次々に30秒ほど提示し、後にこれらの名前を想起して言わせる）。</p>	<p>1. 目、耳、口の指示</p> <p>2. 絵の中の事物の列挙</p> <p>3. 2数詞の反唱</p> <p>4. 文章の反唱（6音節文）</p> <p>5. 家の名（姓）を言う</p> <p>6. 自分の性別を言う</p> <p>7. 見慣れた事物の名を言う</p> <p>8. 3数詞の反唱</p> <p>9. 2本の直線の比較</p> <p>10. 2つのおもりの比較</p> <p>11. 正方形の反唱</p> <p>12. 文章の反唱（10音節文）</p> <p>13. 4つの硬貨の数え方</p> <p>14. 2片によるはめ締め</p> <p>15. 文章の反唱（16音節文）</p> <p>16. 2つの顔の美の比較</p> <p>17. 身近な事物の用途による定義</p> <p>18. 同時になされた3つの命令の実行</p> <p>19. 自分の年齢を言う</p> <p>20. 午前と午後を区別</p> <p>21. 絵の欠けている部分の描画</p> <p>22. 手指の数（10本）を言う</p> <p>23. 手本の文の模写</p> <p>24. 三角形とひとし形の模写</p> <p>25. 5数詞の反唱</p> <p>26. 絵の内容の叙述</p> <p>27. 13種の硬貨の数え方</p> <p>28. 4種の通貨の名称</p> <p>29. 2つの記憶のための読み方</p> <p>30. 1スウ貨3枚と2スウ貨3枚で9スウを計算</p> <p>31. 4つの色の名</p> <p>32. 20から0まで逆に数える</p> <p>33. 記憶から2つの事物の差異を挙げる</p> <p>34. 書き取り</p>	<p>1908年版からの変更はなし</p> <p>1908年版からの変更はなし</p> <p>1908年版からの変更はなし</p> <p>「午前と午後を区別」用途によって定義する</p> <p>「ひとし形の模写」1スウ貨を使い、13スウを数える</p> <p>2つの顔の審美的な比較</p> <p>「右の手」「左の耳」絵の内容の叙述</p> <p>3つの命令の遂行</p> <p>1スウ貨と2スウ貨で13スウを数える</p> <p>4つの色の名称を言う</p> <p>想起による2つの物の比較</p> <p>20から0まで逆に数える</p> <p>絵の欠けている部分の描画</p> <p>日時を言う</p> <p>5数詞の反唱</p>

<p>18. 記憶による図形の描写：注意力、視覚的記憶力および多少の分析力が要求される（2つの図形を10秒間見せ、再生させる）。</p>  <p>19. 数字の即時反唱：直接記憶と即時的注意力が要求される（11問と同様であるが、誤りが重要な意味を持つ…判断力の欠如など）。</p> <p>20. 想起による既知の物の類似性：注意力、類似の観念および観察力が要求される（ひなげしと血、蝶と蜂と蝶、新聞とカードと絵などの似ている点を問う）。</p> <p>21. 長さの比較：敏速な比較による判断力が要求される（2線の対「一方は30mm、もう一方は31~35mm；15対。一方は100mmと101~103mm；12対」を比較し長い線を指示する）。</p> <p>22. 5個のおもりの配列：注意の持続的方向づけ、重量の弁別、判断の記憶などが要求される（色、形、大きさともに等しいが重さの異なる5個のおもり「3g、6g、9g、12g、15g」を重し順に左から並べる）。</p> <p>23. おもり除去後の推理：22問とはほぼ同じであるが、加えて推理力、記憶力が要求される（22問が正しくできたら、すぐに子どもの目を閉じさせておもりの1個を取り去り、どれがなくなったか指摘させる）。</p> <p>24. 単語の組み合わせ：語彙の豊富さ、柔軟性、知的活動の自覚性が要求される（服従「obissance」と同じ順の単語を1分間できるだけたくさん言う）。</p> <p>25. 文中の空白処理：記憶力や文章力、判断力などが要求される（文末が欠けている文章を読み上げ、問いかける調子で声を中断させ、子どもに続きを言わせる）。</p> <p>26. 3つの単語による1つの文章作成：自覚性、創意、流暢性、作文力などが要求される（「パリ、川、運命 [財産] の3つの単語を用いて1つの文章を完成させる）。</p> <p>27. 抽象的質問への解答：抽象的な理解が要求される（文章の初めの部分だけを読み、「どうしたらよいか？」と数回たずねる。例：非常に重大なことを決める前に何をしなければなりませんか？など25問）。</p> <p>28. 時計の針の逆転：推理、注意力、視覚的想像力が要求される（6時20分と3時4分間の2つの時刻について長針と短針を逆にしたときの時刻を想像によって言わせる）。</p> <p>29. 切り抜き問題：意図的注意力、推理力、視覚的想像力が要求される（子どもの前で紙を四つ折りにする。折り目が1つとなる辺を三角形に切り抜き、それを広げたときどうなっているかを描かせる）。</p>  <p>30. 抽象語の定義：語彙、抽象的思考が要求される（2つの抽象語「尊敬と敬愛、遠逝と苦悶」の相違点を言わせる）。</p>	<p>35. 年月日を完全に言う（年号、月、日、曜日）</p> <p>36. 1週間の曜日の名称</p> <p>37. 用途以上の定義</p> <p>38. 6つの記憶のための読み方</p> <p>39. 20スウでの釣り銭</p> <p>40. 5つの重さ比べ</p> <p>41. 1年間の月の名称</p> <p>42. 9種の通貨の名称</p> <p>43. 3語を2つの文章に用いる</p> <p>44. 了解問題（その1）…3問</p> <p>45. 了解問題（その2）…5問</p> <p>46. 不合理な文章の批判</p> <p>47. 3語を1つの文章に用いる</p> <p>48. 3分間に60語以上を挙げる</p> <p>49. 抽象語の定義</p> <p>50. 語順を正す</p> <p>51. 7数詞の反唱</p> <p>52. 顔合わせ</p> <p>53. 文章の反唱（26音節文）</p> <p>54. 絵の内容の解釈</p> <p>55. 記事に関する問題</p> <p>56. 切り抜き問題</p> <p>57. 三角形の置換</p> 	<p>・20スウでの釣り銭</p> <p>・用途以上の定義</p> <p>・9種の通貨の名称</p> <p>・1年間の月の名称</p> <p>・易しい質問の理解</p> <p>・5つの物を重さの順に並べる</p> <p>・記憶をもとにして図形を描く</p> <p>・不合理な文章の批判</p> <p>・難しい質問の理解</p> <p>・3語を2つの文中に用いる</p> <p>・線の暗示への抵抗</p> <p>・3語を1つの文章に用いる</p> <p>・3分間に60語以上を言う</p> <p>・3つの抽象語の定義</p> <p>・類同不明の文の理解</p> <p>・7数詞の反唱</p> <p>・顔の合う3つの語を見つける</p> <p>・26音節の文の反唱</p> <p>・棒し絵の解釈</p> <p>・雑報記事に関する問題</p> <p>・切り取られた部分の理解</p> <p>・三角形をこしらえる</p> <p>・大統領に関する質問に答える</p> <p>・抽象語の定義</p> <p>・エルビュー (Hervey) の思想を要約する</p>
---	--	---

『知能の発達と評価』A. ビネー・Th. シモン著（中野善達・大沢正子訳）福村出版 1982年をもとに作成 2003年

表2 田中ハネ一知能検査比較表 (1947年版, 1954年版, 1970年版, 1987年版, 2003年版)

1947年版			1954年版			1970年版			1987年版			2003年版									
年齢	番号	問題名	合格基準	年齢	番号	問題名	合格基準	年齢	番号	問題名	合格基準	年齢	番号	問題名	合格基準						
2	1	記憶による反応(ねこまがし)	2/3	1	1	3種の型のはめこみ	2/2	1	1	3種の型のはめこみ	2/2	1	1	チップ差し	11						
	2	名称による事物の指示	4/6		2	2	ねこまがし		2/3	2	2		大さがし	2/3	2	2	大さがし	2/3			
	3	身体各部の指示	3/4		3	3	名称による物の指示		6/6	3	3		身体各部の指示(畜体)	2/4	3	3	身体各部の指示(畜体)	2/4			
歳	4	3種の型のはめこみ	1/2	歳	4	3種の型のはめこみ	3/4	歳	4	語い(物)	1/6	歳	4	4	語い(物)	1/6					
	5	絵単語(物の名称・絵)	2/17		5	5	積木つみ		5/17	5	5		積木つみ	2回目まで	5	5	積木つみ	2回目まで			
	6	物の名称(物の名称・物)	3/6		6	6	物の名称(絵)		3/7	6	6		語い(絵)	1/15	6	6	名称による物の指示	12			
	7	用途による事物の指示	3/6		7	7	物の名称(物)		3個以上	7	7		ひもとおし	3/6	7	7	簡単な指示に従う	19			
	8	簡単な命令の執行	2/3		8	8	簡単な命令の執行		2/3	8	8		簡単な命令の執行	18	8	8	3種の型のはめこみ	2/2			
級	9	玉通し(ひもとおし)	2個以上	級	9	用途による物の指示	7/17	級	9	用途による物の指示	22	級	9	9	用途による物の指示	21					
	10	物の名称(物の名称・物)	4/6		10	10	物の名称(絵)		7/17	10	10		用途による物の指示	22	10	10	語彙(絵)	24,25,37			
3	11	絵単語(物の名称・絵)	7/17	2	11	簡単な命令の執行	2/3	2	11	語い(物)	4/16	2	11	11	チップ差し	1					
	12	絵単語(物の名称・絵)	1/3		12	12	簡単な命令の執行		2/3	12	12		語い(絵)	6/19,25,37	12	12	名称による物の指示	6			
	13	用途による物の指示	5/6		13	13	積木つみ		2/2	13	13		動物の見分け	8/9	13	13	動物の見分け	8/9			
	14	トンネル	基準		14	14	まるの大きさの比較		2/2	14	14		まるの大きさの比較	2/2	14	14	語彙(物)	4			
	15	線の線を引きこと	基準		15	15	用途による物の指示		4/6	15	15		文の記憶(A)	1/2	15	15	形の大きさの比較	4/4			
	16	絵単語(物の名称・絵)	10/17		16	16	動物の見分け		6/9	16	16		語い(物)	5/6	16	16	2語文の復唱	1/2			
	17	物の名称(物の名称・物)	5/6		17	17	動物の線を引きこと		2/2	17	17		ご石の分類	完全	17	17	色分け	完全			
	18	動物の線の見分け	4/9		18	18	動物の線の見分け		2/2	18	18		簡単な命令の執行	2/3	18	18	身体各部の指示(主体)	5/5			
	19	まるの大きさの比較	2/2		19	19	まるの大きさの比較		2/2	19	19		語い(絵)	6,12,25,37	19	19	簡単な指示に従う	7			
	20	ボタン(ご石)の分類	2分完全		20	20	ボタン(ご石)の分類		2分完全	20	20		物の名称(絵)	10/17	20	20	線の線を引きこと	1/2			
	級	21	絵の組合わせ		1/2	級	21		絵の復唱	1/2	級		21	2語詞の復唱	1/3	級	21	21	ひもとおし	6/7	
		22	3語詞の復唱		1/3		22		絵の組合わせ	1/5			22	22	絵の組合わせ		10	22	22	用途による物の指示	9
		23	了解(オナカ, ネムイ)		1/2		23		トンネル作り	1/2			23	23	トンネル作り		1回で完	23	23	絵の組合わせ	2/3
24		絵単語(カリンゴ, オナカ, カサ)	2/3	24	物の名称(物)		1/2	24	24	絵の組合わせ		6/7	24	24	語彙(絵)		10,25,37				
4	25	玉通し(ひもとおし)	7個以上	3	25	理解	1/2	3	25	語い(絵)	6,12,19,37	3	25	25	語彙(絵)	10,24,37					
	26	数概念(2個)	3/3		26	物の名称(絵)	13/17		26	26	小鳥の絵の完成		規準	26	26	小鳥の絵の完成	基準				
	27	絵単語(物の名称・絵)	15/17		27	動物の線の見分け	4/6		27	27	理解		1/2	27	27	短文の復唱(A)	1/2				
	28	反対類推	4/6		28	動物の見分け	9/9		28	28	大と自動車の配置		完全	28	28	属性による物の指示(物の選択)	5/6				
	29	定義	3/3		29	物の選択	3/3		29	29	文の記憶(B)		1/2	29	29	位置の記憶(木と自動車の配置)	完全				
	30	動物の線の見分け	9/9		30	数概念	9/9		30	30	数概念(A)		4/4	30	30	数概念(2個)	4/4				
	31	材料の質	2/3		31	3語詞の復唱	2/3		31	31	反対類推(A)		2/4	31	31	物の定義	2/3				
	32	文の記憶	1/3		32	用途による物の指示	6/6		32	32	物の選択		6/6	32	32	絵の真同弁別	9/9				
	33	絵の選択	6/6		33	反対類推	6/6		33	33	物の定義		3/6	33	33	物の定義	2/2				
	34	絵の完成(小鳥の絵の完成)	基準		34	絵の完成(小鳥の絵の完成)	基準		34	34	絵の完成(小鳥の絵の完成)		2/3	34	34	絵の真同弁別	9/9				
級	35	数概念(3個)	3/3	級	35	数概念(3個)	3/3	級	35	3語詞の復唱	2/3	級	35	35	反対類推(A)	2/4					
	36	3語詞の復唱	1/3		36	4語詞の復唱	1/3		36	36	文の記憶		1/3	36	36	数概念(B)	2/2				
	37	了解(眼, 耳)	1/2		37	長方形の組み立て	3/3		37	37	語い(絵)		6,12,19,25	37	37	語彙(絵)	10,24,25				
	38	絵の穴所指挿	3/5		38	理解	1/2		38	38	順序の記憶		15/15	38	38	順序の記憶	18/18				
歳	39	切断図形の組立	2/3	歳	39	絵の真同弁別	12/12	歳	39	理解(B)	1/2	歳	39	39	理解(身体機能)	1/2					
	40	絵の真同	12/12		40	絵の穴所発見	4/5		40	40	数概念(C)		2/2	40	40	数概念(1対1の対応)	2/2				
級	41	絵単語(物の名称・絵)	16/17	級	41	数概念	2/2	級	41	数概念	2/3	級	41	41	長方形の組み合せ	3/3					
	42	数概念(2, 10, 3, 6, 1)	4/4		42	数概念(2, 3, 6, 10)	4/4		42	42	迷路		15/17	42	42	迷路	2回までに完				
	43	了解(眼, 耳)	2/2		43	了解(眼, 耳)	2/2		43	43	迷路		2回完	43	43	反対類推(B)	2/3				
	44	13個の小石(ご石)の計算	2/2		44	13個の小石(ご石)の計算	2/2		44	44	数概念(D)		4/4	44	44	数概念(10個まで)	6/6				
	45	玉つなぎ(ひもとおし)	2分2/2		45	玉つなぎ(ひもとおし)	2分2/2		45	45	左右の弁別		3/3	45	45	左右の弁別	2/4				
歳	46	反対類推	5/6	歳	46	反対類推	3/4	歳	46	4語詞の復唱	1/3	歳	46	46	三角形模写	1/3					
	47	絵単語(カリンゴ, オナカ, カサ)	3/3		47	迷路(1954独自)	2回までに完		47	47	絵の穴所発見		2/2	47	47	絵の穴所発見	5/5				
	48	差異(物の差異)	2/3		48	差異(物の差異)	2/3		48	48	物の差異		1/3	48	48	模倣によるひもとおし	2/2				
級	49	模倣によるひもとおし	2/3	級	49	模倣によるひもとおし	2/3	級	49	模倣によるひもとおし	2/3	級	49	49	模倣によるひもとおし	2/3					
	50	模倣によるひもとおし	2/3		50	模倣によるひもとおし	2/3		50	50	模倣によるひもとおし		2/3	50	50	模倣によるひもとおし	2/3				

1947年版			1954年版			1970年版			1987年版			2003年版				
年齢 級	番号	問題名	合格 基準	年齢 級	番号	問題名	合格 基準	年齢 級	番号	問題名	合格 基準	年齢 級	番号	問題名	合格 基準	
7	49	ひし形模写	2/3	49	ひし形模写	2/3	49	49	49	絵の不合理(A)	2/3	49	49	絵の不合理	4/4	
7	50	打叩計算(打数数え)	3/3	50	打叩計算(打数数え)	3/3	50	50	50	3数詞の逆唱	1/3	6	50	曜日	3/3	
歳	51	反対類推	2/3	51	反対類推	2/3	51	51	51	ひし形模写	2/3	歳	51	ひし形模写	1/3	
歳	52	文の記憶	1/2完	52	文の記憶	1/2完	52	52	52	3数詞の逆唱	1/3	歳	52	理解(問題場面への対応)	2/3	
歳	53	絵の不合理	2/3	53	絵の不合理	2/3	53	53	53	打数かそえ	2/3	歳	53	数の比較	2/4	
歳	54	3数詞逆唱	1/3完	54	3数詞逆唱	1/3完	54	54	54	理解	2/3	歳	54	打数かそえ	3/3	
8	55	了解	2/3	55	了解	2/3	55	55	55	文の記憶	2/2	歳	55	関係類推	3/3	
8	56	曜日の名	4/4	56	曜日の名	4/4	56	56	56	曜日の名	4/4	7	56	記憶によるひもとおし	1/2	
歳	57	話の不合理	1/3	57	話の不合理	1/3	57	57	57	物の共通点	2/3	歳	57	共通点(A)	2/3	
歳	58	文の構成	1/3	58	文の構成	1/3	58	58	58	頭文字の同じ単語	2/3	歳	58	数の比較	4/4	
歳	59	図形の記憶	1/2完	59	図形の記憶	1/2完	59	59	59	4数詞の逆唱	1/3	歳	59	頭文字の同じ単語	各2計12	
歳	60	共通点	2/3	60	共通点	2/3	60	60	60	話の不合理	1/2	歳	60	話の不合理(A)	1/2	
9	61	問題の解決	2/2	61	問題の解決	2/2	61	61	61	文の記憶	1/3	8	61	短文の復唱(B)	1/2	
9	62	頭文字の同じ語	3/3	62	頭文字の同じ語	3/3	62	62	62	文の記憶	1/3	8	62	記憶によるひもとおし(B)	完全	
歳	63	事物の異同	1/3	63	事物の異同	1/3	63	63	63	図形の記憶(A)	2/3	歳	63	数的思考(A)	1/2	
歳	64	文の整頓	2/3	64	文の整頓	2/3	64	64	64	物の異同	1/3	歳	64	短文作り(文の構成)	1/2	
歳	65	4数詞の逆唱	1/3	65	4数詞の逆唱	1/3	65	65	65	話の不合理	2/2	歳	65	垂直と水平の推理	1/2	
歳	66	話の不合理	2/2	66	話の不合理	2/2	66	66	66	場面の理解	2/2	歳	66	共通点(B)	1/2	
10	67	動物の名(1947)	1分10以上	67	動物の名(1947)	1分20以上	67	67	67	話の記憶(A)	2/5	9	67	絵の解釈(A) 交通事故	基準	
10	68	積木の計算	6/14	68	積木の計算	6/14	68	68	68	単語の列挙	15以上	9	68	数的思考(B)	1/2	
10	69	話の記憶	2/5	69	話の記憶	2/5	69	69	69	積木の列挙	6/14	歳	69	差異と共通点(物の異同)	1/2	
10	70	話の不合理	1/3	70	話の不合理	1/3	70	70	70	物の共通点	1/2	歳	70	図形の記憶(A)	2/2	
10	71	抽象語	2/3	71	抽象語	2/3	71	71	71	記憶によるひもとおし	1/2	歳	71	話の不合理(B)	1/2	
10	72	記憶による玉つなぎ	1/2	72	記憶による玉つなぎ	1/2	72	72	72	話の不合理	1/2	歳	72	単語の列挙	18以上	
11	73	共通点	2/3	73	共通点	2/3	73	73	73	絵の解釈	基準	10	73	絵の解釈(B) 選足	基準	
11	74	話の不合理	4/6	74	話の不合理	4/6	74	74	74	話の記憶(A)	1/2	10	74	話の記憶(A)	3/4	
11	75	抽象語(抽象・具体・異同)	3/4	75	抽象語(抽象・具体・異同)	3/4	75	75	75	場面の理解	1/2	10	75	ポールさがし	基準	
11	76	理由の発見(理解)	2/3	76	理由の発見(理解)	2/3	76	76	76	6数詞の復唱	1/4	歳	76	数的思考(C)	1/2	
11	77	絵の解釈(ガケウス)	基準	77	絵の解釈(ガケウス)	基準	77	77	77	抽象語	2/3	歳	77	文の完成	2/3	
11	78	6数詞の復唱	1/4	78	6数詞の復唱	1/4	78	78	78	ポールさがし	基準	歳	78	積木の数(A)	10/14	
12	79	文章の記憶	1/3	79	文章の記憶	1/3	79	79	79	文の記憶	1/3	11	79	語の意味	85	
12	80	伏字(文の完成)	3/4	80	伏字(文の完成)	3/4	80	80	80	文の完成	3/4	11	80	形と位置の推理	90	
12	81	抽象語(発達・家庭・努力)	2/3	81	抽象語(発達・家庭・努力)	2/3	81	81	81	抽象語	2/3	11	81	話の記憶(B)	1/2	
12	82	図形の記憶(10秒提示)	基準	82	図形の記憶(10秒提示)	基準	82	82	82	3数詞の逆唱	1/3	歳	82	数的思考(D)	1/2	
12	83	絵の不合理(風の方角・季節)	2/3	83	絵の不合理(風の方角・季節)	2/3	83	83	83	図形の記憶(B)	基準	歳	83	話の不合理(C)	各2計7以上	
12	84	5数詞の逆唱	1/3	84	5数詞の逆唱	1/3	84	84	84	話の不合理(B)	2/3	歳	84	木橋・人橋のつく漢字	各2計7以上	
13	85	記憶による玉つなぎ	1/2	85	記憶による玉つなぎ	1/2	85	85	85	話の不合理(C)	76	12	85	語の意味	79	
13	86	話の記憶(軽業師)	3/6	86	話の記憶(軽業師)	3/6	86	86	86	話の不合理(B)	3/6	12	86	分類	4/5	
13	87	積木の計算(1分間)	1/3	87	積木の計算(1分間)	1/3	87	87	87	積木の数(B)	2/3	12	87	数的思考(E)	1/2	
13	88	文章の整頓	2/2	88	文章の整頓	2/2	88	88	88	文章の整頓(B)	2/2	歳	88	図形の記憶(B)	基準	
13	89	単語の記憶	1/3	89	単語の記憶	1/3	89	89	89	単語の記憶	1/3	歳	89	文の整頓(B)	2/2	
13	90	抽象語(成長・運命・防衛・理想)	2/4	90	抽象語(成長・運命・防衛・理想)	2/4	90	90	90	抽象語	2/4	歳	90	形と位置の推理	80	
14	91	推理	4時-4時半	91	推理	4時-4時半	91	91	91	共通点(C)	1/3	91	91	共通点(C)	2/2	
14	92	俳句・原句の発見(形と位置)	2/2	92	俳句・原句の発見(形と位置)	2/2	92	92	92	方向	1/2	13	92	6数詞の復唱	1/3	
14	93	方向	2/3	93	方向	2/3	93	93	93	場面の推理	基準	13	93	暗号	2/3	
14	94	抽象語(円周・温度・芸術)	3/4	94	ことわざの解釈(1954独自)	2/3	94	94	94	ことわざの解釈	1/2	歳	94	積木の数(B)	2/4	
14	95	工夫	1/3	95	工夫	1/3	95	95	95	工夫	1/3	歳	95	積木の数(B)	2/4	
14	96	概念の法的区別(弁論と導論・事実と推定)	2/3	96	7数詞の復唱(1954独自)	1/3	96	96	96	7数詞の復唱	1/3	歳	96	話の不合理(D)	1/2	
															三段論法(論理的推理)	3/3

1947年版			1954年版			1970年版			1987年版			2003年版		
年齢級	番号	問題名	合格基準	年齢級	番号	問題名	合格基準	年齢級	番号	問題名	合格基準	領域	番号	下位検査名
普通	97	抽象語 (円満 加減 温順 芸術)	3/4	普通	97	抽象語 (成長 防衛 勇猛 円満)	3/4	成人	97	概念の共通点 (夏と冬 日と夜 多いと少ない 高いと低い 農産と畜産)	3/4	結	A01	抽象語
普通	98	反対類推	1/3	普通	98	反対類推	2/3	成人	98	算数 (D)	2/3	結	A06	概念の共通点
普通	99	関係把握 (箱の問題)	2/3	普通	99	関係把握 (箱の問題)	2/3	成人	99	場面の推理	2/3	結	A08	文の構成
普通	100	方向	3/3	普通	100	方向	3/3	成人	100	ことわざの解釈 (A)	2/2	結	A10	ことわざの解釈
成人	101	共通点の発見 (冬と夏 幸福と悲哀 日と夜 多いと少ない 飽と足りない)	1/5	成人	101	共通点の発見 (冬と夏 幸福と悲哀 日と夜 多いと少ない 飽と足りない)	2/5	成人	101	位置関係	2/5	流動	A15	概念の区別
成人	102	算数推理	2/3	成人	102	算数推理	2/3	成人	102	類似の問題 (A) 単位のみの変更	2/3	流動	A03	積木の立体構成
優秀	103	文の構成 (形式・法則・印象・致情・遊・逃走 失敗・奇談・無能)	2/3	優秀	103	文の構成 (形式・法則・印象・致情・遊・逃走 失敗・奇談・無能)	2/3	成人	103	6 数詞の逆唱	1/2	流動	A13	マトリックス
優秀	104	本質的類似 (職業と工業 詩人と樵夫 卵と種子)	2/3	優秀	104	文の構成 (1954を認識)	2/3	成人	104	文の構成 (1954を認識)	2/3	流動	A11	語の記憶
成人	105	6 数詞の逆唱	1/3	成人	105	類似の発見 (職業と商業・業と作るともえる 卵と種子)	1/2	成人	105	箱の数の把握	3/3	論	A02	関係推理 (順番)
1	106	共通点の発見	2/5	1	106	6 数詞の逆唱	1/2	成人	106	ことわざの解釈 (B)	2/3	論	A04	関係推理 (時間)
成人	107	暗号	1/2	成人	107	共通点の発見	2/5	成人	107	ことわざの解釈 (A)	1/2	論	A05	関係推理 (ネットワーク)
成人	108	工夫	2/3	成人	108	暗号	2/3	成人	108	暗号 (A)	2/3	推	A07	関係推理 (種目)
2	109	格言の意味 (二語…、猫に小判)	1/2	優秀	109	格言の意味 (二語…、猫に小判)	1/2	成人	109	工夫	2/3	推	A09	数量の推理 (工夫)
優秀	110	文章の大意	基準	優秀	110	文章の大意	基準	成人	110	工夫	2/2	推	A12	数量の推理 (木の堆ひ)
成人	111	工夫	3/3	成人	111	文章の大意	3/3	成人	111	文意の大意	12/15			
成人	112	概念の本質的区別 (労働と遊戯 算とけちめ坊 無精と怠惰)	3/3	成人	112	概念の区別	3/3	成人	112	概念の区別	5/10			
2	113	暗号	1/2	2	113	暗号	1/2	成人	113	暗号 (B)	2/2			
成人	114	8 数詞の復唱	1/3	成人	114	8 数詞の復唱	1/3	成人	114	8 数詞の復唱	1/2			
3	115	格言の意味 (弘法筆を、雲に惹りて、八カと)	2/3	3	115	格言の意味 (弘法筆を、雲に惹りて、八カと)	2/3	成人	115	三段論法	2/3			
成人	116	文の記憶	完全	成人	116	文の記憶	完全	成人	116	ことわざの解釈 (C)	1/2			
成人	117	方向と距離	2/2	成人	117	方向と距離	2/2	成人	117	文の構成 (B)	2/3			
成人	118	9 数詞の復唱	1/3	成人	118	9 数詞の復唱	1/3	成人	118	概念の区別	2/2			
3	119	反対類推	3/3	3	119	反対類推	3/3	成人	119	方向と距離	107			
成人	120	推理 (8尺の木を…)	基準	成人	120	推理 (8尺の木を…)	基準	成人	120	算数問題 (B)	6/10			